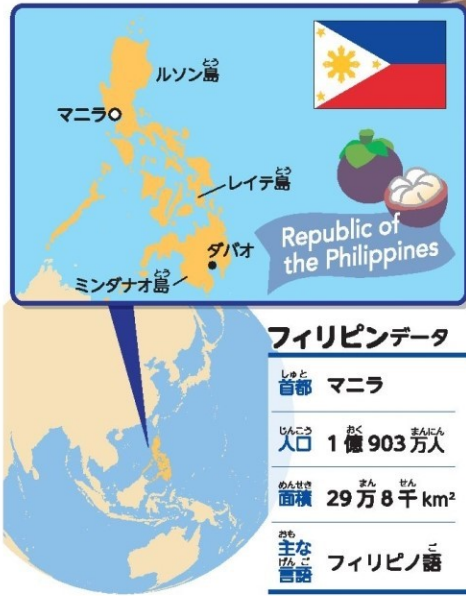




フィリピン あさ さか ゆた だい ち 麻で栄えた豊かな大地

戦前、ハワイやブラジルなどと並んで多くの県民が渡った地・フィリピン。麻栽培を中心に発展しますが、日米両軍の戦闘に巻き込まれ、多くの住民が犠牲となりました。

フィリピン共和国



フィリピンデータ	
首都	マニラ
人口	1億903万人
面積	29万8千km ²
主な言語	フィリピン語



●フィリピンワシ
つばさを広げると2羽に達する世界最大級のワシ。森林伐採などで激減し、絶滅危惧種に指定されている

●トロピカルフルーツ
東南アジアでも指折りのフルーツ大国でマンゴーやドリアン、マンゴスチンが有名。日本で売られているバナナの9割はミンダナオ産

●コルディリエーラの棚田
ルソン島の中央山岳地帯に広がる世界最大規模の棚田。ユネスコの世界遺産に登録されており、その美しさは「天鏡に昇る階段」といわれている

●ハミギタン山
ミンダナオ島南東の山岳地帯にある1637年の山。絶滅危惧種を含む1300以上の動植物の生息地で、ハミギタン山にしかない固有種も多い

●サンアグスチン教会
17世紀初頭に完成したフィリピン最古の石造りの教会

●スキューバダイビング
国内に多くのダイビングスポットがあり、なかでも美しいサンゴ礁が広がるセブ島は世界中のダイバーが集まる

●バスケットボール
アメリカの植民地だった影響で、いたるところにバスケットコートがある。プロリーグはNBAに次ぐ歴史があり、アジア最古



世界屈指の労働力輸出大国

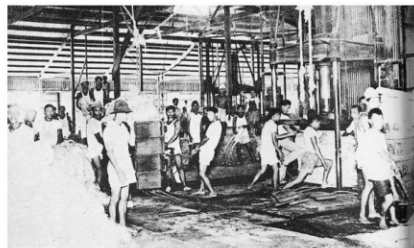
フィリピンは南シナ海と太平洋の間にある東南アジアの国で、7000以上の島からなります。ほとんどが熱帯雨林気候で、美しい海と豊かな自然に恵まれています。国内に多くの火山があり、1991年にピナトフ山が20世紀最大と言われる大噴火を起こしました。

フィリピンでは10人に1人が外国で働いていると言われており、GDP(国内総生産)の1割は外国で働く人からの送金となっています。英語が公用語の一つで、国民が総じて英語力が高いことから、世界中のさまざまな職場でフィリピン人労働者が迎え入れられています。

長く続いた異民族支配

フィリピンは紀元前から人が暮らしていました。1571年までにほとんどの島がスペイン領となります。大規模農場が造られ、タバコやサトウキビ、アバカ(麻)を栽培しました。1898年、アメリカがフィリピンを獲得しました。1901年、ルソン島のベンゲット道路建設のため2800人の日本人が渡りました。道路完成後、兵庫県出身の太田恭三郎が移民を引率しミンダナオ島ダバオに移住。ダバオを開墾し、アバカ栽培に力を入れます。太田は太田興業を設立し、本格的な麻栽培事業を展開しました。第一次世界大戦が始まると、ダバオは麻景気に沸きます。

1944年の在フィリピン沖縄県人は1万7728人に達し、日本人移民全体の7割を占めました。41年、日本軍は真珠湾攻撃と同時にフィリピンのアメリカ施設にも空襲します。敵国人となった日本人は学校施設などに収容されました。42年6月、日本軍がフィリピンを占拠し、軍政を敷きます。44年10月、米軍はフィリピン奪還を目的にレイテ島に、翌4月にはミンダナオ島に上陸。住民は日本軍の指示に従い、ダバオの山奥タモガンに逃げますが、逃避行は悲惨を極めました。この地上戦で軍民合わせて約51万人の日本人が亡くなり、多くのフィリピン人も戦闘に



太田興業工場内での麻の荷造り。「フィリピン・ダバオ開拓写真集」(1940年発行)より(沖縄県ダバオ会提供)

巻き込まれ犠牲になりました。太平洋戦争終結後の46年、フィリピンは独立を宣言。長く列強に支配されたフィリピンでは「スペインは宗教を、アメリカは言葉を、日本は憎しみをもたらした」と言われています。

県系人の歩み

砲弾と飢えに苦しむ

沖縄からフィリピンへの移民は1904年、ベンゲット道路工事のために114人が海を渡ったのが始まりです。道路開通後も現地に残った移民の多くは新たな働き口を求め、ミンダナオ島ダバオに渡ります。生活が厳しい沖縄から多くの県民がフィリピンを目指しました。

県民の多くはダバオに住み、アバカ栽培に従事しました。麻需要に伴う好景気を背景に移民も増加し、定住者も増えていきます。16年には沖縄県人会が組織されます。アバカ畑で共に働く現地住民との関係も良好でした。43年のダバオ在留日本人は1万9089人。そのうち1万166人が沖縄県出身者でした。県人の中にはルソン島やパナイ島で漁業や商業を営む人もいました。

1世は子弟の教育にも熱心で、寄付金を募り各地に日本人学校を設立しました。現地でアメリカ人教師を雇い英語を教えるなど、高い教育水準を誇りました。

42年6月、日本軍がフィリピンを占拠します。軍事色が強くなり、現地住民に対しても皇民化教育を行いました。44年、フィリピン奪還を目指し、米軍はレイテ島を皮切りに各地に上陸。日米の地上戦が繰り広げられます。各地で日本軍によるフィリピン人虐殺も起きました。

45年4月、ミンダナオ島に米軍が上陸。ダバオにいた日本人は着の身着のままタモガンに避



空襲を受けたダバオ市内。「ダバオ懐かし写真集」(1988年発行)より(沖縄県ダバオ会提供)



コロナ禍で3年ぶりにダバオの塔で行われた慰霊祭。弔辞を述べた沖縄県ダバオ会の山入端嘉弘会長＝4月26日、糸満市の平和祈念公園

難します。住民は砲弾と極度の飢えに苦しみがらジャングルを逃げ惑いました。マラリアや栄養失調で亡くなる人が続出。日本兵による食料強奪もありました。フィリピンでの県系人の犠牲は1万2000人に上りました。

敗戦後の45年10月、米軍は日本人の引き揚げを命じます。現地女性との間に生まれた子どもや孤児の中には、反日感情渦巻くフィリピンに残され、残留日系人2世となった人もいました。

引き揚げ後、ダバオの元移民や遺族で全国ダバオ会を発足。各都道府県ごとに慰霊と現地住民との交流を目的に墓参旅行が行われてきました。また、戦後も多くの県民がフィリピンに渡り1982年にはマニラを中心にフィリピン沖縄県人会を設立。沖縄文化の継承発展に努めています。

ステキな先輩!

いつか祖父の生まれた地へ

ダバオ県系2世の孫 安里 良太さん(26)

沖縄市立美里中学校で社会科を教える安里良太さん(26)の祖父・勝さん(86)はダバオ出身の県系2世です。良太さんは、ダバオで生まれ、地上戦と沖縄引き揚げを経験した祖父の記憶を引き継ぎ、次代につなげたいと考えています。良太さんが物心つく前からフィリピンを行き来していた勝さん。良太さんが中学生になり、現地で亡くしたきょうだいへの慰霊のために訪れて

いたことを知ります。「ダバオで生まれたこと、戦争や引き揚げで苦労したことも知らなかったから衝撃だった」と振り返ります。もともと無口な勝さんですが、少しずつフィリピンでの思い出を話してくれるようになりました。小1まで学校に通っていたこと、米軍の砲撃を受け弟を失い、自身も大けがをしたこと、引き揚げ先の鹿児島県加治木町で姉と弟を失

ったこと。「おじいちゃんがいて、その重みを感じている」と話します。今も厳しい生活を強いられる残留日系人の問題も「人ごとではない」と感じているそうです。

良太さんは勝さんとともにダバオを訪問し、祖父の生まれた地を

見て、その歴史を感じたいと考えています。「体験者の高齢化が進む中、今が話を聞く最後のチャンス。聞いて記録して、小さな規模でも慰霊祭を続けていけたらいい」。教師として孫として、勝さんの記憶をつないでいきたい力を込めました。



ダバオ県系2世の安里勝さん(写真左)と孫の良太さん。「コロナが落ち着いたら、共にダバオへ行きたい」と計画を立てている＝6月29日、北中城村

暮らし支えたアバカ

アバカはマニラ麻ともよばれる高さ6メートルにもなるバショウ科の植物です。皮から軽くて強い繊維を取ることができ、船舶用ロープの原料として世界的に高い需要がありました。アバカの生産を飛躍的に伸ばしたのは動力ハゴタンと呼ばれる麻ひき機械です。それまで手作業でアバカをひいていましたが、効率が悪く重労働でした。金武町出身で太田興業副社長の

大城孝蔵が中心となり水力を活用したハゴタンを実用化。その後、小型発動機を使ったハゴタンが普及します。手びきで1日平均10トンだった生産量が、ハゴタンの利用で1時間20トンと飛躍的に増加。太田興業・古川拓殖などでは機械びきが開発され、生産量は1日4トンにもなりました。ハゴタンの導入でアバカの増産が可能になり、人々の暮らしをより豊かなものにしました。



太田興業の麻ひき工場。動力ハゴタンを使い大量のアバカを繊維にした「フィリピンダバオ開拓写真集」(1940年発行)より(沖縄県ダバオ会提供)

協力・沖縄県ダバオ会、監修・沖縄県立図書館、紙面制作・熊谷樹、上原明子

(毎月第1週掲載)